

# Access map



〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1  
東北大学公共政策大学院専門職大学院係  
TEL:022-217-4945

URL <http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>  
e-mail [contact@publicpolicy.law.tohoku.ac.jp](mailto:contact@publicpolicy.law.tohoku.ac.jp)



2007 大学院案内



# 「公共」の 「政策大学院」をめざして

東北大学公共政策大学院は、国家・地方・国際公務員などの「政策の企画立案についての専門性を有する人材を教育する大学院」として、2004年に発足しました。

「今、時代は大きく動いています。世界的には、グローバル化・情報化の進展、環境問題等新たな政策課題の重要性の高まりなどがあります。日本においては、経済社会の成熟化、少子高齢化の急速な進行などがあります。これらは、海外や過去に処方箋を求めても見つかるようなものではなく、我々が自ら考えなければならぬ問題ばかりです。こうした状況の中で、「公」に携わる人にも、従来を超える能力・資質・知識等が求められています。」

——これは、その時に私たちが打ち出した設置の趣旨ですが、基本的な考え方は今も同じです。「公」ないし「公共性」は、これからますます多様化していくでしょう。もはや「公」とは何か、という問いには誰も答えはくれません。自ら体験し、それを理論的観点から問い直し、他人と意見を交換し、議論を交わす中で、おぼろげながら仄見えるものなのです。

政策の根本に横たわる「公」とは何か自らの頭で考えぬき、「公」を目指して行動する姿勢を持った人材を育てる大学院——それが私たちの大学院です。

そのために私たちは、知識教授型の授業では決して得ることのできないもの、たとえば、フィールド・サーヴェイ、徹底した議論、多面的な観点からの問題の理解、その上での問題の本質

を捉える力、実行可能性の検証、理論による裏打ちといった要素をカリキュラムの中心においています。それが本大学院独自の授業である「公共政策ワークショップ」です。そこでは、教員集団と学生グループとは、互いの顔が見える空間の中で、具体的な「政策」の立案作業に取り組みます。週3コマ、自主活動を含めれば週6コマ以上のインテンシブな討論を、実務家・研究者の専任教員がしっかりと見つめる中で学生が一年を通じて続け、最終的な政策案を練り上げていきます。

学生は、年間を通じた体験修得型の授業を通じて、自ら考え、行動し、ときには失敗を通じて学んでいきます。つまり、「公」の問題を考えることは、「公とは○○だ」と言い放つことではなく、「公」を考えぬいたプロセスを周囲の人たちと一つ一つ共有していくことなのです。

本大学院は、「公」という価値をカリキュラムの中にプロセスとして綿密に組み込みました。新入生オリエンテーションから最終報告会までの行事の数々、少人数のスクーリング、「公共政策ワークショップ」は、すべて綿密に計画された集団の作業です。これはつまり、「公」という理念に近づくための仕掛けなのです。大学院の中で、共同で「公」とは何かを考えぬいたときにはじめて、真の意味で社会の公共空間に参画し、これを担う有用な人材が育つ——私たちは堅くこう信じています。

「公共」の「政策大学院」をめざして、私たちはこれからも歩んでいきます。

### 1 体験型政策教育を中核とするカリキュラム

必修科目「公共政策ワークショップ」で集団作業を通じた政策企画立案を体験します。テーマは現在の行政機関が抱える政策課題です。随時政策現場に調査に行き、教員の丁寧な指導と学生の自主討論を通じて政策案を作成する実践を通して、学生は自らのスキルを磨きます。

### 2 少数精鋭の学生に対するきめ細かな教育

1学年30人(2年制)の学生に対して、主要な授業(コアカリキュラム、公共政策ワークショップ等)だけでも10名以上の教員がインテンシブに担当し、きめ細かな教育を実施します。また、学生一人一人にアドバイザーがつき、履修相談・進路相談を定期的に行っています。

### 3 高度な理論教育

新しい時代にふさわしい公共政策を企画するための基盤となる高度な理論を、気鋭の研究者教員が教育します。政策現場を見つめ直し、対象を客観的に分析する姿勢を学びます。

### 4 多数の実務家による政策実務の教育

6名の実務家教員による公共政策ワークショップと講義のほか、非常勤講師として、中央省庁の事務次官・局長による講演、自治体首長・地域経済界・マスコミ関係者による講演も随時行われます。

### 5 政策プロフェッショナルを養成

中央政府・地方政府・国際機関等における公共政策の企画立案を担う「政策プロフェッショナル」を養成。

### 6 2年間で修了

実務経験を有し、かつ特に優秀な成績を修めた学生に限り、1年間で修了も可能。

### 7 修了者には「公共法政策修士(専門職)」を授与



#### 東北大学公共政策大学院へようこそ

東北大学大学院法学研究科長・教授(国際法)  
植木俊哉  
1983年東京大学法学部卒。同助手、東北大学法学部助教授を経て、東北大学大学院法学研究科教授。2004年4月より東北大学大学院法学研究科長及び東北大学法学部長。専門は、国際法・国際組織法。現在、国際法学会理事・評議員、同雑誌編集委員会委員等をつとめる。

皆さん、東北大学公共政策大学院へようこそ。東北大学公共政策大学院は、2004年4月に開設された我が国における先駆的な公共政策分野での専門職大学院です。国家レベルや地方レベル、さらに国際的なレベルのいずれにおいても、われわれ人間が営んでいる日々の社会生活のあらゆる側面は、さま

ざまな「政策」によって規律されており、このような無数ともいえる「政策」こそが人間社会の「歴史」を形成してきたと言っても過言ではありません。社会の専門化、複雑化とグローバル化が急速に進展しつつある今日、このような社会の複雑な諸課題に立ち向かう専門的な資質と能力を有する「政策プロフェッショナル」の養成は、最も重要な社会的課題となっています。この分野において我が国で先導的な地位にある東北大学公共政策大学院の使命と役割は、ますます大きなものとなっていると言えます。

積極的な意欲あふれる多くの若い皆さんが、是非この新しい大学院に集い、恵まれた教育環境の下で研鑽を積み、国家や地域、そして世界のさらなる発展のために貢献する「政策プロフェッショナル」として社会で活躍していただくことを念願してやみません。



◀公共法政策通論での浅野前宮城県知事の講演

## 概要

東北大学公共政策大学院のカリキュラムは、「公共法政策通論」、「公共政策ワークショップ」、「コア・カリキュラム」、「政策体系論」、「リサーチ・メソッド」、「展開科目」よりなります。

履修の流れは、以下の図の通りです。

1年次前期	1年次後期	2年次前期	2年次後期
公共法政策通論	公共法政策通論	公共法政策通論	公共法政策通論
公共政策ワークショップⅠ		公共政策ワークショップⅡ	
コア・カリキュラム	コア・カリキュラム	コア・カリキュラム	コア・カリキュラム
政策体系論	政策体系論	政策体系論	政策体系論
リサーチ・メソッド			
展開科目	展開科目	展開科目	展開科目

### ■公共法政策通論(通年、4単位まで必修)

「公共法政策通論」は、知事・次官経験者等による、わが国が直面している重要な政策課題を通覧するオムニバス講義です。

### ■公共政策ワークショップ(1年次・2年次配当、各12単位で計24単位必修)

リサーチメソッド、コアカリキュラム等の基礎的な科目の履修と並行して、学生は「公共政策ワークショップⅠ・Ⅱ」を履修し、現実の政策課題を自ら調査し、解決策を立案する実務研修を2年にわたって行います。

1年次では、「公共政策ワークショップⅠ」を通年履修します。ここでは、中央官庁・地方自治体などの各種団体・組織(以下、「プロジェクト機関」と呼ぶ)との協力関係を結び、それらが抱える政策課題への解決策を立案するため、実務家教員・研究者教員の指導の下、10名程度の学生がグループ作業で、政策課題の具体化・行政機関へのヒアリング・現場調査・統計データの収集を行いつつ、討論を繰り返して、解決策を作成します。

解決策は、プロジェクト機関の担当者ないしは学外の実務家の前でプレゼンテーションされ、さらにはペーパーとして提出されます。成績評価は、グループ単位で行われ、プロジェクト機関と担当教員双方の協議の結果評定されます。

国際機関を対象とするものを除けば、「プロジェクト機関」を仙台市近辺

のものとすることによって、学生が隠せず「プロジェクト機関」と接触できるよう配慮するとともに、身近な政策課題を調査対象とすることによって、学部卒の学生が円滑に政策実務に取り組めるよう配慮しています。

2年次では、学生は「公共政策ワークショップⅡ」を通年履修します。これは、政策領域(以下「政策モジュール」と呼ぶ)ごとに、6つのグループに学生を分け、それぞれが担当の実務家教員・研究者教員と相談しながら独自の政策課題を選択します。

政策課題は、当初から「プロジェクト機関」を特定せず、国ないしは国際レベルの大規模な 이슈を学生が自ら調べて、各自が設定します。「公共政策ワークショップⅠ」で調査の基本的な技法を習得した学生は、担当の実務家教員・他の学生と十分な討論を行いながら、中央省庁の本省庁さらには諸外国の国際機関本部などに自ら足を運んで担当者と接触し、現場で自ら調査を行うことによって、調査技法及び実社会での交渉技術の一層の向上に努めます。

調査の成果は、逐次中間報告の形で各セミナーで討論に付され、綿密に議論を重ねていくことによって、学生の相互啓発を促し、その意味でグループ活動としての要素をとりいれます。

最終報告は、担当教員・全学生の出席する報告会で報告され、そのプレゼンテーション内容と別途提出されたペーパーとによって成績が評定されます。

### ■コア・カリキュラム(1年次前期・後期配当、12単位まで必修)

学生は1年次より「コア・カリキュラム」の諸科目を履修し、研究者教員による少人数に対するスクーリングを受けます。

ここでは、第一に、現実の政策課題を自ら調査する能力を付けることが目的となり、法律学・政治学・経済学・自然科学についてバランスのとれた教育が行われます。各科目は、可能な限り学際的であることが目指され、複数の法領域・政策領域に関わる問題を多角的な学問領域から分析するように配慮され、実務家教員との連携・学外の実務家による講演などをも交えて行われます。

第二に、将来行政・政治に関わる公人となることが期待される学生には、公共性についての理解を深め、現象の背後に存在する理念的・価値的な問題についての洞察力を涵養することが求められます。したがって、学生には、研究者教員の指導の下で、大量の研究文献のリーディング・アサインメント及びターム・ペーパーが課せられます。

### ■政策体系論(1年次・2年次配当、自由選択)

学生は1年次から2年次にかけて、「政策体系論」を履修することができます。これは、実務家教員ないしは政策専門家による授業で、政策実務を明晰かつ平明な「体系」として教授するとともに、事例に則して、体系の現実的意味の理解をも目指すものです。

政策実務の授業を、単なる平面的なスキルの問題としてではなく、「体系的・理論的深みを備えた問題として理解させることが、この授業のねらいです。

政策体系論が複数開講され、多様な政策領域についてより深く理解することが目指されます。

### ■リサーチ・メソッド(1年次前期配当(集中)、2単位まで必修)

入学直後において学生は「リサーチ・メソッド」の諸科目を履修し、インターネットによる情報収集や、自ら情報を「足で稼ぐ」インタビューなど、政策実務を調査するための基本的な技法を集中的に習得します。

ここでは、法学部出身の学生のみならず、理科系を含めた他学部出身の学生にも配慮した教育を行い、すべての学生が円滑に履修を行えるよう十分留意しています。

### ■展開科目(1・2年次配当、12単位まで必修)

「コア・カリキュラム」及び「公共政策ワークショップ」の履修と並行して、学生は必要に応じて、より高度な社会科学の専門知識を習得し、または理科系の諸学を含めたより広範な領域にわたる政策学について学びます。

なお、修了には必修科目を含め48単位以上の履修が必要です。

## ■東北大学公共政策大学院科目一覧(予定)

大学院1年、2年(M1/M2)において、以下の公共政策ワークショップⅠ、公共政策ワークショップⅡ、コア・カリキュラム、公共法政策通論、リサーチ・メソッド、政策体系論、展開科目を開講する予定です。

### (1)公共政策ワークショップⅠ

- プロジェクトA
- プロジェクトB
- プロジェクトC
- プロジェクトD

### (2)公共政策ワークショップⅡ

- 政策モジュールⅠ～Ⅵ

### (3)コア・カリキュラム

- 現代の行政法制とその横断的検討
- 国際社会と各国法秩序
- 租税制度と政策税制の課題
- 統治機構の動態分析
- 国際社会の変容とグローバル・イシュー
- 経済学理論
- 財政学
- リスク社会の科学と政策

### (4)公共法政策通論

- 公共法政策通論Ⅰ・Ⅱ

### (5)リサーチ・メソッド

- 政策調査の技法

### (6)政策体系論

- 政策体系論 政策実務A  
(食料・農業・農村政策体系論)
- 政策体系論 政策実務B  
(国際人権・刑事法政策体系論)

### (7)展開科目

- 地域社会と公共政策Ⅰ
- 地域社会と公共政策Ⅱ
- 租税法原論
- 企業課税論
- 国際知的財産法
- 実務労働法Ⅰ
- 実務労働法Ⅱ
- 社会保障法
- 経済法実務
- 経済法理論
- 環境法Ⅰ
- 環境法Ⅱ
- トランスナショナル情報法
- ジェンダーと法演習
- 現代政治分析
- 比較政治学
- ヨーロッパ政治史
- 西洋政治思想史

## Voice



### グローバルな秩序構築への貢献

教授  
西村 篤子

東京大学教養学科卒業。スタンフォード大学修士。外務省入省後、仏国立行政学院、法規課首席事務官、不拡散室長、アフリカ課長、国連代表部公使、在ベルギー大使館公使等を経て2004年9月より現職。

近年、グローバリゼーションの進展とともに、国内行政の分野にも国際的な規律が及ぶようになり、また、冷戦後の新たな脅威など多くの課題に直面している国際社会が、適切なルールと制度を実現できるかどうかは、今後の日本の安定と繁栄に直結する問題となっています。日本の国益を踏まえて、グローバルなルール・制度づくりを担うことのできる意欲と能力を備えた人材が育つことを期待しています。



### 「変化」の相をつかむ

教授  
牧原 出

1967年愛知県生まれ。東京大学法学部助手、東北大学助教授を経て、2006年4月より東北大学教授。専攻は行政学。主著は「内閣政治と「大蔵省支配」(サントリー学芸賞)。

現在、日本の統治機構は大きな変革期にさしかかっています。授業の素材は、遠い過去からも、また日々の報道からも拾い出すことができます。「統治機構の動態分析」では、制度の一つ一つについて、こうした変化を授業で説明した後に、それに関わる政府諮問機関の報告書・議事録を講読していきます。大きな歴史的な「変化」と現在進行中の「変化」とを同時につかむことが目的です。

# 公共政策ワークショップ

## Workshop

「公共政策ワークショップⅠ・Ⅱ」（1年次・2年次配当、各12単位で計24単位必修）とは、現実の政策課題を自ら調査し、解決策を立案することを通じて実務の現場の目線に立って、政策実務能力を修得することを目的とした体験型の授業です。教員の指導の下、集団作業の中で、フィールド・サーヴェイ、徹底した議論、問題の本質を捉える力、政策の実行可能性の検証、理論的裏づけなど、政策を企画立案する上で必要な観点を多角的に体験し、学生が自分の力で考え、失敗を乗り越えて進んでいく力を身につけることがねらいです。

### 1 公共政策ワークショップⅠ

1年次に通年で履修する「公共政策ワークショップⅠ」では、すでに協力関係を結んでいる中央省庁・地方自治体等の各種団体・組織（以下「プロジェクト機関」）が抱える政策課題について、実務家教員・研究者教員の指導の下、行政機関へのヒアリング・現地調査、統計データの収集等を行いつつ、議論を繰り返して解決策を立案することが標準的な形態となります。

取り上げられるテーマは、その年によって異なりますが、内政、経済、国際、環境などの分野から、現実に政策課題となっているものが取り上げられます。

#### ■ワークショップ・プロジェクト一覧

2004年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然災害の被災者に対する居住の確保支援</li> <li>地域の資源・企業・資金のネットワークを活かした産業基盤の強化：東北経済の自立へ向けて</li> <li>グリーン購入の普及について</li> <li>仙台市の産業立地の現状と課題</li> </ul>
2005年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>広域市町村における新たな食料・農業・農村基本政策の推進方策—「食」と「農」が共生するまちづくりの提案</li> <li>保健福祉分野における行政計画と政策評価</li> <li>日本の国際協力における「人間の安全保障」の推進</li> <li>人口減少下における白石市への政策提案</li> </ul>
2006年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域における地球温暖化対策（仙台市を事例として）</li> <li>地域経済活性化のための地域金融機関及び金融行政の課題と将来像</li> <li>「21世紀東アジアのグランド・デザイン構築における日本の役割」に関する政策提言</li> <li>地方都市の中心市街地活性化及び地方都市における産業廃棄物の適正処理対策</li> </ul>



▲ワークショップ作業室での議論

ここでは、6～8名程度の学生と実務家教員・研究者教員各1名のグループで運営されますが、各参加者が役割と責任を持ちチームとして行動していくことを通じて、政策の企画立案能力だけでなく、実社会でまさに必要とされる集団の中の一員として責任ある行動をとっていく能力を涵養することも目指しています。教員は適宜学生の自主的な活動を尊重し、学生が自分の力で問題に接近するように努めています。少人数だからこそ、学生の個性を把握しつつ、教員の指導と学生の自主作業とを結びつけることが可能なのです。

#### ■スケジュール例

前期	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教員、プロジェクト機関担当者からのレクチャー</li> <li>文献講読による現状把握</li> <li>予備的な現地調査</li> </ul>
夏～秋	<ul style="list-style-type: none"> <li>実地調査、関係者へのヒアリング、アンケートの実施</li> <li>調査結果の分析</li> <li>中間報告会へ向けた基本方針の作成</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間報告会</li> </ul>
11月～1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>政策目的・政策手段の再検討、政策案の実行可能性の検証と精緻化</li> <li>さらなるデータ収集、本省へのヒアリング、比較事例の現地調査</li> <li>最終報告書の完成</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>学内での最終報告会</li> <li>プロジェクト機関への報告</li> </ul>

宮城県庁でのヒアリング



2004年度 WSにおける仙台市への報告



立案される政策案は、机上の空論にならないよう、グループ内の徹底した議論の中で多様な観点から検討されます。検討がなされた内容について、秋には、教員・学生全員が参加する中間報告会が行われます。中間報告会では、各ワークショップの学生たちが、これまでの検討によって明らかになった問題点とこれを解決するための施策の基本的考え方などが報告され、それに対して厳しい質疑応答が行われることにより、最終報告に向けて考えを深めるきっかけを得ることが可能となります。

#### ■現地調査の例

##### ①宮城県北部地震被災者へのアンケート

2003年7月に発生した宮城県北部地震によって住宅が全壊した被災者の住宅確保・再建状況について調査。

予備調査として、現地町役場と被災地を見学した後、宮城県、地元町の協力を得て無作為に抽出した280の対象世帯を訪問し、あらかじめ送付した調査票について、直接ヒアリングを行った

##### ②市の取り組み食料・農業・農村政策と合併市町村の政策展開への聞き取り調査

仙台市経済局農政部農政企画課・農業振興課、八戸市企画部防災調整課、鶴岡市総務部政策調整室・産業部農業振興課、会津若松市企画政策部企画調整課・産業振興部農政課、秋田市地域振興局総務課・農林部農林総務課、酒田市企画調整部企画調整課、盛岡市産業部農政課 等

中間報告会の後も補足の調査や検討が行われ、完成した提案は、2月の最終報告会で報告されます。特に最終報告会では提案の内容だけでなく、説明及び質疑応答の的確さについても検討及び評価が行われます。これらを通じて、政策に関する文書の作成能力のみならず、質問能力・プレゼンテーション能力・答弁能力も涵養されていきます。

また、最終報告会の後、プロジェクト機関への報告も開催されます。



▲ワークショップの調査風景

### 2 公共政策ワークショップⅡ

2年次に通年で履修しなければならない「公共政策ワークショップⅡ」は、政策領域（政策モジュール）ごとに、いくつかのグループに学生を分け、それぞれが担当の実務家教員・研究者教員と相談しながら独自の政策課題を選択するという形態で行われます。

政策課題は、学生各自が設定することになります。「公共政策ワークショップⅠ」で調査の基本的な技法を習得した学生は、担当の教員や他の学生と十分な議論を行いながら、中央省庁の本省庁や地方公共団体、あるいは国際的な機関等に自ら足を運んで担当者と接触し、現場で自ら調査を行うことによって、調査技法および実社会での交渉技術の一層の向上に努めることとなります。

調査の結果は、逐次各グループ内で議論に付され、綿密に議論を重ねていくことによって、学生の相互啓発を促すとともに、その中でグループ活動としての要素が加味されることとなります。

最終報告は、リサーチペーパーの形でとりまとめられ、担当教員等による書面及び口述の審査を経ることによって、政策立案・説明等の能力の一層の涵養を図ることとしています。特に優秀なペーパー作成者は、全教員・全学生の前でペーパーについて講演を行います。

## Voice



#### 「人は変わる」を実感

教授  
坪野 吉孝

1989年東北大学医学部卒、1993年同大学院修了。国立がんセンター研究所、ハーバード大学公衆衛生大学院、東北大学医学部助教授を経て、2004年4月より現職。

2005年度「公共政策ワークショップⅠ」の主担当を務めました。調査の成果を発表する年2回の報告会の直前には、議論も普段以上に白熱し、徹夜状態での作業が何日も続きました。報告会当日のプレゼン、予行演習での不安な出来栄からは想像できないほど、堂々としたものでした。厳しい課題に共同で取り組むことで、人は変わり、成長する。そう実感することの多い一年でした。



#### グループ活動を学ぶ

教授  
渥美 恭弘

1957年静岡市生まれ。1979年東京大学経済学部卒業後、大蔵省（現財務省）入省。米留學、伊勢税務署長、証券局業務課課長補佐、IMF審議役、内閣官房情報調査室経済部主幹等を経て、2005年7月より現職。

現在私が担当している「ワークショップⅠ」では、地域経済の活性化のための地域金融機関の課題及びそれをサポートするための行政サイドの政策について、日々、戸内・戸外の調査を精力的に進めています。2ヶ月が経過したところで、学生は未だ暗中模索の悪戦苦闘状態ではありますが、郷土に対する熱い思いを胸に、自らの考えをお互いにぶつけ合い切磋琢磨する中で、「グループとしての活動の仕方」を学んでいるようです。そこに「ワークショップⅠ」の大きな意義があるのです。

# 東北大学公共政策大学院第3期生座談会

## Round-table talk

### この大学院に入ろうと思った理由と 実際に入ってみて

戸澤助教：まずは、座談会のキックオフということで公共政策大学院についての現在の印象から。入学してから2カ月ほど経つわけだけど、大学院に志望した意図は満たされているか、とか。

水野光：僕は、政策をどう国民に理解してもらおうかということに興味があって、ここを志望しました。ただ、学問を行うだけでなく、WS(ワークショップ)で政策実務に近い立場で学ぶことができるのが公共政策大学院を志望した理由です。実際に入ってみた印象としては、自分から働きかければ、どんどんいろいろなことが学べる機会が転がっているなあ、と。

田野優佳：私も、政策立案についての実践的な訓練ができるということに興味を持ちました。実際に入ってみると、学ぶことがとても多くて結構大変。でも、先生方とても密で、この機会を大切にしたいと思っています。

林智子：たしかに大変。でも、いろいろな大学から学生が集まるので、刺激があって面白い。

駒井彰史：僕は他の公共政策大学院も考えていたのですが、実務的な学習ができる点で東北大学を選びました。ここは足で調査する、という側面が強いかな、と。

太田雄基：入学前には国家公務員試験の予備校のようなものかなとも考えていたけど、全く違う。同期生が皆それぞれに公共性や実際の政策についての考え方をもっているし。

加賀谷修：私の場合は県庁に勤務して14年になりますが、業務が特定の分野に偏っており、他の部局、例えば農業政策や商業政策といった分野のことがよくわからなかった。政策横断的な学習の機会があると聞いて、この大学院を志望しました。役所だと先が見えてきた段階で積極的な人と消極的な人に分かれるようなところもあるけど、ここでは学生は常に積極的で、前向きであり、刺激を受けています。

### 政策調査の技法、コアカリキュラム、 公共法政策通論について

戸澤：授業に話題を進めましょう。政策調査の技法は、今年度から4月の授業が始まった直後の一週間で集中的に行うことにしたわけだけど、どうでしたか？

田野：課題もいっぱいあって、初めて挑むことも多かったんで、少し不完全燃焼なところがありました。2週間あればもうちょっとできたんじゃないかなと。あと、インタビュー実習は面白かった。

戸澤：インタビューはどういうところに行っただけですか？

加賀谷：「伊達の牛タン」の社長さんのところへ。

駒井：僕は、J2ベガルタ仙台の運営会社さんの東北ハンドレットという会社に。

戸澤：どういことを聞くわけ？

駒井：ベガルタ仙台は、行政との関わり合いが強いクラブで、宮城県と仙台市で半分近く出資している。それで、具体的にどういう関わりを持っているのかを。かなり、本音を聞かせてもらった。

林：私は仙台市内の商店街の組合の理事長さんに宛てに申し込んで、実際に話を伺ったのは事務局長さん。インタビューの時にテーブルコーダーで録音するのをやめてほしいと言われたので、文字通りのオフレコ。目も見ずにメモを取り続けるというのも失礼だし、言われた内容を書きとめつつ、話を聞くのは非常に大変で。

戸澤：いいトレーニングでしたね。コアカリキュラムや他の授業はどう？

水野：「地域社会と公共政策Ⅱ」が非常に勉強になる。ゼミ形式の授業で、少人数でやっているの。

太田：「地域社会と公共政策Ⅰ」の方は講演形式で外部の講演者によるものですね。それから、必修の公共法政策通論も講演形式。1・2回目は松原先生が農業法について。3・4回目は元宮城県知事の浅野先生が福祉について色々話してくれました。知事を経験した方の話は初めて聞いたので、一般的な行政官とは違った種類の間人だなあと。

田野：それ以外にも、いろいろな省庁の実務経験者が来る。今まで私があまり注意を払っていなかった分野の実務家の方の話聞く好機ですね。

聞く人の興味関心、持っている知識によって得るものが違ってくる授業だと思う。

加賀谷：松原先生の「食料・農業・農村政策体系論」を取っていますが、授業の中でディベート形式を取り入れていて非常にいいな、と思いました。私は審判を務めました。双方の主張の長所と弱点が鮮明に理解できます。ディベート形式だとゲーム性もあるし。

水野：環境法や労働法はロースクールと共通の授業で人数が多いな。

### WS(ワークショップ)について

太田：僕と駒井君の参加している「地域経済活性化」WSでは、主として基礎知識の修得をしている段階。政策提言というゴールを定め、それを達成するにはどのような知識が必要か。先月は、財務局、日銀、県庁、市役所、銀行、信金などにヒアリングに行き、地域金融の現状を学びました。

戸澤：プリーフィングを受けて基礎知識をつけているということ？

駒井：そうですね。先方のプリーフィングも受けますが、事前に個人個人が質問を考えてこちらから興味や関心事項を伝えてあり、その場でもQ&Aがつづく感じです。

林：「地域における地球温暖化対策」WSは、仙台市に対しての政策提言を行うので、まず4月に仙台市の環境局が実際に何をやっているのかをヒアリングしました。その後、そもそも地球温暖化とは何か、何が問題なのか、基礎的な研究に立ち返って。

水野：そうそう。温暖化になるとすぐに問題が発生するわけではないので、2010年までに温室効果ガスを6%減らすという目標を立てて対策を行うとなると、地球温暖化の実際の影響を伝えていく必要があり、それに説得力を持たせるため数値的なものを拾って検証している。

戸澤：今後「現場」に出るような予定は？

水野：日本の中でも温暖化対策に対して先進的な取組をしている京都市での調査を念頭に置いています。

戸澤：国際WSはどうですか？私も副担当なので聞きにくいですが。(笑)

田野：私のWSは「21世紀東アジアのグランドデザイン構築における日本の役割」に関する政策提言を行うもので、他のWSと比較してテーマが広い。まず困ったことは、誰に対する提言かという点から始めなければならないこと。例えば、それが日本政府なのか、東アジア諸国なのか。「東アジア」とは何かもわからない。そうした全てのことについて私たちに選択権が委ねられている。

戸澤：WSにかかる時間はどれくらい？

林：みんなで集まるのは、授業がある火曜の3コマ、プラス木曜ですね。もちろんその他に個人個人で作業する時間があります。

太田：僕たちのWSも火曜日と木曜日に集まるけど、5月は関係機関に対するヒアリングがあったので、木曜日にも1時に集合し、5時まで一旦WSをやって、それから夕食を挟んで再び整理と検討をしていました。

### 大学院生活について

戸澤：WSの部屋では、ほぼ毎日顔を合わせる？

太田：よく来る人と来ない人がいますね。会わなくても大丈夫なようにWS室のPCで情報を共有したり、重要なものはプリントアウトして配るようになっています。

戸澤：WS-Dは、4人だし、毎日顔を合わせる感じ？

加賀谷：私が講義を多く取っているせいで会えない部分もあるんですが、(苦笑)人数が少ない分、全体の関連性が強くて、お互いにやってる事は分かります。

戸澤：個人個人の作業はどこでやってるの？

林：人によりますね。家に持ち帰っている人もいますし、WS室でやる人もいます。

戸澤：WS室は24時間オープンで作業できるようになっているわけだけど…。

太田：林さんは夜遅くまでいるよね。

林：いるけど、さすがに24時間もいないですよ。(笑)でも半日以上いることはよくあるかも。

駒井：冷蔵庫がいいんだよね。

## Voice

### <学生からの一言メッセージ>



田野 優佳

学習院大学法学部卒、千葉県出身

個々人の勉強も重要ですが、公共政策大学院で学び始めてそれと同じくらい重要だと思うのは、仲間との協調性です。広い視野を養い、仲間と議論し協力して、公共政策について考えていきましょう。



駒井 彰史

岩手大学人文社会科学部卒、青森県出身

「理論」と「実践」はどちらか一方が欠けてしまっただけは現実社会において上手く機能しません。我々三期生と共に様々な課題に取り組み、共にそうした能力を涵養しませんか。



林 智子

東北大学経済学部卒、富山県出身

WS(ワークショップ)は大変です。自分たちで議論を進めていくのも、資料集めも、集団作業も。ただ、得るものもそれだけ大きいです。やりがいがありますよ！



太田 雄基

東北大学法学部卒、北海道出身

昨今、公務員に求められる資質が大きく変化しています。真に必要なとされる公務員になるために、その本質を探究しませんか？

# 東北大学公共政策大学院第3期生座談会

## Round-table talk



**太田:**ピンポイントだね。(笑)それと、行けば誰かいるってところがいいかな。  
**戸澤:**なるほどね。だけど、WS室のネガティブな面として、居心地が良過ぎるということもあり得るよね。例えば、公務員試験準備のように、大学院の授業以外の勉強が必要な人は、どうやって勉強してる？ WS室じゃ難しいんじゃない？

**林:**自習室が家でですね。WS室でそういう個人的な勉強するのは後ろめたくて。それと人がいっぱいいるからつい喋っちゃうし。

**太田:**けじめのつけ方の上手い同期生は、公務員試験の勉強は自習室で、WSの勉強はWS室でっていう風に行き来している。そのあたりは真似したいなあ。

**駒井:**でも太田君は、WS室でも公務員試験の勉強できるんだよね。

**太田:**喫茶店みたいに人が多いところで勉強できる人はできる。ただWS室は話しかけられるリスクがある。(笑)

**戸澤:**4月から仙台に来た人は、仙台の印象はどう？

**駒井:**あおば通、定禅寺通りが綺麗。

**田野:**出身地の千葉市には千葉大学があるが、仙台の方が学生が多いように感じます。あおば通のカフェで学生が勉強している姿を見ると、学都だなんて。

**水野:**仙台に新幹線が来る途中の風景は、田畑ばかりで…仙台駅に到着してからコンビニを見つけたときは思わず友達に電話をしたほど。(笑)でも、仙台市内を見れば、東京の都市部と比較してもそれほど遜色ないですね。

### 将来に向けて

**太田:**僕は、将来公務員になって、格差社会という問題と取り組みたいと思う。格差が生じるのはある程度仕方ないと思うけど、社会全体としてどこまで許容できるか、どういった手当てが必要か。これからの行政が取り組まなきゃならない重要な課題だと。

**林:**私が地方公務員を目指すのは、地域に根ざした政策がしたいから。もちろん、国が行う防衛や外交といった政策や法律も大事だと思うけれど、東京の霞ヶ関にいてやれることは限られていると思う。地域のどこがいけ

ないのかを見て、実際に政策を作って。うまくいっているかどうか、自分の目でも手ごたえでも分る。そういう仕事をやって行きたいから、ここで力をつけたいと思いました。

**戸澤:**大学院に入る前だと、何か足りないことがあった？

**林:**そのままだと、全部が新しいことだらけで受け入れるだけになってしまっていた。今なら、どんな文献を調べよう、どこにヒアリング行ってみようか、どういう流れで問題点を見つけてどうするかとかが何となく分かるので、そうだとすると他の人よりはもう少し余裕を持って広い視野でやっていけるのではないかなと思う。知識があるだけじゃ、不十分じゃないですか。

**太田:**大学院に入る前になかったのは調整能力ですね。公務員には周りの意見を調整しながら、最終的に1つの意見にまとめる能力が必要で、例えば格差のあり方についてもさまざまな考え方があって、それをまとめる能力を大学院で学びたいと思った。学部時代には部活動をやっていて、そこでは体育会系的なまとめ方があったけど、もう少し論理的な説得の仕方を学びたいとも思っている。

**水野:**僕はちょっと違うかな。社会に出てそのまま役にたつ能力というか、就職してから学ぶことはそれからいいかなと。学部時代にはホッケーをやったり、国際関係についてもかなり勉強した。ここでは、公共法政策通論のように、いろいろな分野の実務について一通り話が聞けるところがいい。  
**戸澤:**学部での勉強とも、実社会でのオン・ザ・ジョブ・トレーニングでもできない、その間がある？

**水野:**仕事に直結して生かせるかはわからないけど、総合的に知識を持っているというのは要所要所で強みになるかな、と。

**田野:**私も公務員志望ですが、公務員になれば様々な問題を抱える様々な省庁に配属される。その中で、1つの問題に専門的に携わることになる人もいると思う。でも、1つの問題には、やはりいろいろな問題が関係しているはずだから、それを全部把握した上で1つの問題を解決するという広い視野を持ちたかった。学部からそのまま公務員になると、オン・ザ・ジョブ・トレーニングになってしまい、それができないと思いました。

**水野:**うんうん。大体賛成。むしろ、言おうと思ったこと持って行かれた!!

**戸澤:**水野君は、公務員試験合格で入ってきているよね。これから官庁回り？

**水野:**そうですね。普通の人にも基礎的なインフラとなるような、例えば

安全保障のような政策や制度作りに関与する省庁を目指したいなあ、と。

**駒井:**僕は、ジャーナリストやシンクタンクとかにも興味がある。林さんと近いんだけど、自分に近い距離で自分の力でまわりが良く変わっていくのを実感したい。「公」のために死んでもいいぐらいになったら、私心をすてて政治家もやってみたい。実際に1番の目標であるいい政治を行うときには絶対足で動いていろんな人の意見を聞かなければならないし、本を読んでいるだけだと対応できないことがたくさんあるので、それを1番ここに期待していた。

**戸澤:**加賀谷さんは？ 将来の進路というわけではないですが。(笑)

**加賀谷:**県庁に戻ったら、という話ですか？ 今回ここで学んでみて、例えば農業政策を考えるにしても、環境分野の側面から考えなければいけないとか、土木でも、農業や環境との関連があるので複眼的にみるのが大事だと思いました。県庁に戻ったときに、そういう能力が身につけていけば、と思いますね。

**戸澤:**この大学院の仲間に啓発されている、刺激されている部分はどこ？ 同期には加賀谷さんのような人もいます。

**水野:**いろいろな大学や学部の人が集まっていて、自分にない視点をどんどん得ることができる。

**駒井:**うちのWS内には、法律3人、政治3人、経済1人、教育1人、経営1人と幅広いバックグラウンドのメンバーがいて、互いに新鮮な視点を感じながら議論している。

**加賀谷:**確かにそういうのがあればいいですね。でも、うちのWSは、ほとんど法学部が出身なので。自分にとっては、社会人だとあきらめてしまうところでも、学生は頑張るといところが良いと思います。

**林:**私は地方公務員を志望しているので、秋田県庁で働いていらした加賀谷さんのような方がいると地方行政の実態が分かって非常に参考になります。

**田野:**公共法政策通論の授業で毎回、加賀谷さんが質問されるのですが、実務家はこういうところを聞くんだなって、視点の違いが非常に勉強になる。

**加賀谷:**みんな優しいですねー。こういうところで勉強できるといいですね。自分の娘も将来ここにしたいなあ。

・・・この後、焼肉屋さんで夕食を共にしながら懇談は続きました。

### ■誕生日飲み会で自己・他己分析 2005年12月16日

12月はワークショップメンバー3人の誕生日です。その都度お祝いするとすると大変なので、真ん中の日を取り、まとめて飲み会を開催しました。毎回私たちの誕生日飲み会では、「ワークショップBを斬る！」という恒例行事を行います。誕生日の人が他のメンバーの、ここがよくない！ってところを辛口コメント。でももちろん長所も盛り込みますよ。いよいよ本格的に始まっていく就職活動において、必要なのは自己分析。他者からの評価を認識することは、自己分析をする上でとても役立ちます。飲み会での会話がこんなところで威力を発揮するんですね。1年間チームを組んだ仲間だからこそ、深いところまで分かっている。そして言いたいことを言い合える関係作り、なによりもこれからのワークショップ作業で必須です！

### ■最終報告直前の奮闘 2005年2月11日

メモパッドにやることを列挙し、一つひとつ片付けていく。各々担当部分を文に起こしたら、随時チェックし合う。この時期になっても飛び出してくるそもそも論点か矛盾点を頭を悩ます。このようなことを1日中、毎日やっています。極限状態ってこういう感じでしょうか。やることがありすぎてありすぎて。この数日間、ワークショップ室に缶詰状態。2時間睡眠で栄養ドリンク&コーヒー漬け。そんな状況でも物怖じせず、わきあいあいと相変わらず私たちが・・・はてさて最終報告、どうなることでしょう。

### ■サンキューWS室 2005年3月22日

とうとう今日はお世話になったワークショップ室撤退の日です。新1年生に明け渡すため、掃除と整理整頓に精を出しました。たまりにたまった不要紙の始末が意外と大仕事。ホチキスをすべて外し、束ねて紐で結ぶ。それを3階から1階の事務室まで手分けして運ぶ。たくさん持ち込んだ私物を片付けるのも一苦労。前期に使った懐かしい資料や記録も出てきて、感傷に浸ったり。鍵とコピーカードを返すとき、電気を消して空っぽになった部屋を出るとき、一抹の寂しさが込み上げてきました。本当にたくさんの思い出が詰まった部屋、心からありがとう！そしてまたこの先、新しいドラマがこの場所で生まれていくのでしょうね。  
(SIMPLISTIC☆VIEWPOINT <http://abyr1122.exblog.jp/>)

## Voice

### <学生からの一言メッセージ>



水野 光

一橋大学法学部卒、愛知県出身

海外青年協力隊でモザンビークに行った経験が、自分の「公」への取り組み方を形づくりました。アグレッシブな人、大歓迎！



加賀谷 修

秋田県庁職員、東北大学法学部卒

この大学院での授業を通じて地域が直面する様々な課題を横断的に検討し、複眼的な思考と問題の本質を捉える力を修得すべく日々努めています。



### <司会担当教員紹介>

#### 「理念」を実現するタフさ

助教授

戸澤 英典

1966年岩手県生まれ。東京大学大学院法学政治学専攻博士課程単位取得退学。エッセイ総合大学、欧州連合日本政府代表部専門調査員、大阪大学法学部講師・助教授を経て2005年4月より現職。専攻は国際関係論。

WSの活動が本格的になった時期に開かれた座談会でしたが、授業や試験対策もこなしながら、グループ作業を通じて自らの能力やスキルをどん欲に高めていこうという姿勢に時に圧倒される思いすらしました。

フィジカルにも知的にもますますタフさが要求される次代の公共政策のプロフェッショナル養成のため、私自身にとっても学生との真剣勝負でタフな日々が続いています。

# 入学試験

# Entrance examination



◀オリエンテーション風景

## 概要

### 1 アドミッション・ポリシー

東北大学公共政策大学院が受け入れる学生像とは、そのカリキュラムによって自己の能力を一層涵養することのできる人物であり、具体的には以下の資質を持つ人物です。

- 公務及び公共政策の立案・制度設計に不可欠の法学・政治学への理解を、基礎レベルで有すること。
- 討論・交渉・文章作成などコミュニケーション能力を豊かに持ち、集団作業への適性を有すること。
- 公共性への情熱を持ち、公務に対し献身的な資質を有すること。

したがって入学試験では、入学後科目履修に必要な法学・政治学への基礎的な理解を有していることを検査するとともに、「公共政策ワークショップ」において集団作業に積極的に参加する人物であることを面接で審査します。

まず第一次選考(筆記試験)では、民法・行政法を中心に、法学・政治学への基礎的な理解を検査するための試験を行います。しかし、専門知識への理解はあくまでも履修に必要な基礎知識を有しているかどうか限定します。

次に、第二次選考(面接試験)は、まず受験生がその場で与えられた題材(新聞の社説等)を基に小論文を書き、その後その小論文に基づいて面接官の口頭試問を受けるという形式で行う予定です。

この面接試験は、受験生の法学・政治学の専門知識を問うものではなく、コミュニケーション能力や集団作業能力等を総合的に判定するために行われます。

以上のように、学生の専門知識については履修に必要な最低限のものであるかを考査するとともに、学生のコミュニケーション能力や集団作業能力を総合的に判定する試験を行います。

これによって、法学部卒業生のみにも有利にならない試験を実施し、社会人・他学部学生が受験しやすいように配慮します。



### 2 出願、入学試験関係の日程・場所

2006年7月上旬までに募集要項などを東北大学公共政策大学院ホームページ(下記URL)に掲載する予定です。

<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>

#### ■2006年9月4日(月)～8日(金) 出願受付

東北大学大学院法学研究科専門職大学院係にて郵送により受付。期間内に必着

#### ■2006年9月30日(土) 第一次選考(筆記試験)

仙台(東北大学公共政策大学院)、東京(東京八重洲ホール)の2か所で実施。試験会場については出願の際に選択

#### ■2006年10月13日(金) 第一次選考合格者発表

東北大学公共政策大学院ホームページ(<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>)上に掲示。受験者には別途通知

#### ■2006年10月28日(土)、29日(日) 第二次選考(面接試験)

仙台にて実施。第一次選考合格者に、2日間の試験日程のうちいずれかの日時を指定して通知

#### ■2006年11月17日(金) 最終合格者発表

東北大学公共政策大学院ホームページ(<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>)上に掲示。受験者には別途通知

募集要項及び出願書類の用紙は、7月中旬以降に法学研究科の窓口で配布します。また、郵便で取り寄せることもできます。郵便での募集要項及び出願書類の取り寄せ申し込みについては、2006年7月18日以降以下の方法にて受け付けます。

- 1) 申し込み方法：返送先の住所・郵便番号、氏名を記入し240円分の切手を貼った角型2号の返信封筒を同封し、表書きに「公共政策大学院募集要項請求」(朱書き)と明記して、下記宛郵送してください。
- 2) 申し込み先：〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学公共政策大学院専門職大学院係

### 3 入学試験・第一次選考《筆記試験》の出題範囲

東北大学公共政策大学院の入学試験のうち第一次選考(筆記試験)は、必修科目(2科目)と選択科目(国際法、労働法、租税法、行政学、国際政治学のうちから1科目選択)の合計3科目により実施する予定です。

それぞれの科目の出題範囲は、下記のとおりです。

#### ■必修科目(2科目とも)

民法：総則、契約法、不法行為法  
行政法：行政行為、取消訴訟、国家賠償

#### ■選択科目(以下のうちから1科目を選択)

国際法：国連憲章(国際連合憲章)、条約法(条約法に関するウィーン条約)  
労働法：労働基準法、労働組合法  
租税法：所得税法  
行政学：中央地方関係、中央政府論(内閣制、省庁制)、行政理論(政策評価・管理評価、行政責任論)  
国際政治学：現在の国際社会が直面している主要な政治・軍事・経済・社会・文化・環境等の問題

## Voice



### 学生の時間、社会人の時間

助教授  
西久保 裕彦

1959年大阪市生まれ。1982年大阪大学法学部を卒業し、環境庁(現在の環境省)入庁。在米日本国大使館環境担当書記官、環境省民間活動支援室長等を経て、2005年7月より現職

学生と社会人の違いはたくさんありますが、時間のとらえ方もその一つではないかと思っています。私も学生だった頃は時間は無限にあるように感じていたのですが、社会人になると極めて限られた時間の中でプロとして仕事をすることが求められます。

公共政策ワークショップでは、学生でありながら社会人と同ような時間感覚を持ち、時間的制約の中でも質の高い仕事をできる能力を身につけることを目指して取り組んでいます。



### 理論と実務の切磋琢磨

助教授  
仲野 武志

1997年東京大学卒、同助手。2000年8月より現職。2002年4～7月、外務事務官併任。

近頃「実務的」研究をもてはやす風潮がありますが、規範は事実になし崩し的に従属するものではなく、両者には一定の緊張関係がなければなりません。コアカリキュラムは、真に磨きぬかれた<理論>は<実務>にも耐えうるはずである、との前提に立っています。

他方、ワークショップの目標は、<理論>に耐えうる<実務>です。そのため、従来の行政現場で「暗黙知」とされてきた領域を可視化しなければなりません。

## After graduation

卒業生の就職先・進路としては、中央政府・地方政府等の基幹要員候補生、国際公務員のほか、ジャーナリストやシンクタンクのスタッフ等を念頭に置いています。

大学の医学部や法科大学院と違い、修了証書と資格試験の受験要件がリンクした大学院ではありません。しかし、今年度の国家公務員試験の制度改革においては、単なる知識にとどまらず応用能力を重視する方向性が強められており、本学のカリキュラムはそれを先取りしたものと自負しています。

また、ワークショップ等を通じて獲得されるであろう、課題発見に始まり情報収集、解決策の作成検討に至る政策の企画立案に関する様々な能力は、社会人として実務に携わっていく上でまさに有用なものであり、およその官公庁・企業等において高く評価されるものと考えています。

なお、国家公務員・地方公務員になる場合、各種の公務員試験に合格する必要があります。これらの試験への対策については、個々人の学習



### WS 経験という財産

若手といえども大きな役割を果たすことが必然的に求められる小規模民間企業に就職した私ですが、入社2ヶ月後に社内で行われた業務改善案発表会の時に、課題を見つけ、改善案を考え、発表するといったワークショップでの経験が自分の中に生きているのを実感しました。ワークショップでの経験は私の最大の財産です。後輩のみなさんには自分を高められる場を自ら選んでいくことの大切さを伝えたいです。

平塚 珠絵

秋田県出身、東北大学経済学部卒。現在、採用コンサルティング企業勤務。



### 連戦連敗の毎日

大学院での2年間は、論戦の毎日でした。この大学院においては、知識を得ることよりも、ひとくせもふたくせもある教員と議論を戦わせることが重要です。徹底的に論破され、立ち直られなくなる寸前まで追い込まれてください。繊細だった神経も、いつの間にか固くなり、圧迫されていることにさえ気づかなくなるでしょう。その時点でこの大学院を修了する資格を得たことになりま。皆さん、入学してみても如何でしょうか？

大泉 玄之助

宮城県出身、東北大学法学部卒。現在、公正取引委員会事務局勤務。



### ギャップ

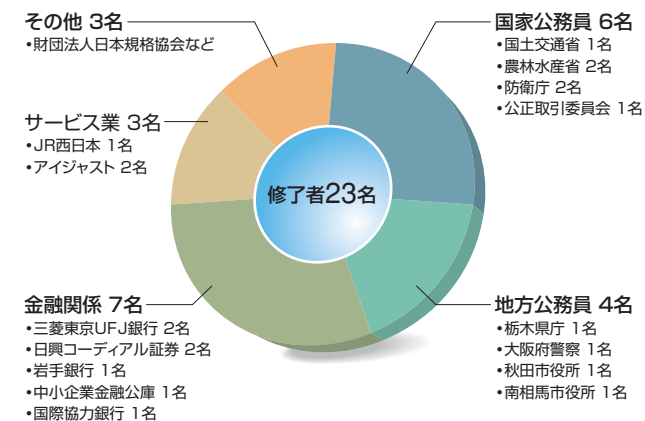
入庁してから大学院で学んだ知識は今のところほとんど役に立たない。しかし、そこで習慣化した考え方やノウハウは非常に有益である。特にワークショップの影響が大きい。省庁の同期や地方自治体の公務員と話をすると、そのギャップに気がつく。大学院のメンバーの間では当然のことと思われていたことが意外とできないのである。具体的にそれは何なのか。それは皆さんが大学院に入り、公務員になる過程で感じていただきたい。

阿部 慎平

山形県出身、東北大学法学部卒。現在、防衛庁管理会計課勤務。

によるところですが、公共政策大学院としても、数度にわたる個別相談や環境整備等を通じて支援しています。

### 今春修了した第1期生の進路は以下になっています

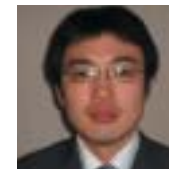


### 理想の実現へ向けて

この春から、念願であった行政官の職に就くことができただけですが、行政官を志す方の大方は、なんらかの「理想」を「実現」することをその動機の一つにしていると思います。しかし現在は、様々な雑務を通じ、「理想」を「実現」する主体の末端において、微力を注いでいるという状況です。しかし、ワークショップで行ったように、いつの日か、自分自身の手で「理想」を「実現」する日を夢見ながら、日々努力しています。

登尾 有祐

三重県出身、東北大学法学部卒。現在、防衛庁勤務。



### 仕事を通して感じること

現在は、都市、産業、交通といった様々な面から国土のあり方を検討する部署に配属され、私の班では、人口減少などの問題を抱える地域の自立をどのように達成するかという事を考えています。まだ任される仕事は、調べもの程度ですが、大学院で身に着けた視点、資料の収集や報告の仕方などは随所に役立っていると感じています。この大学院は、自分かのぞみ限り鍛えたい能力を向上させることが可能な場です。先生方、友人を活用して、成長していきましょう。

三林 直慶

東京都出身、早稲田大学法学部卒。現在、国土交通省国土計画局総合計画課勤務。



### 官民間問わず

本大学院にて学ぶ事は知識を如何に使いこなすかの術です。社会に出ると、膨大な知識を有した人に会うことは多いのですが、それを自分のものとして、しっかりとアウトプットできる人にはなかなかお目にかかれないものです。WSを中心に優秀な教員に意見を真っ向からぶつけてください。とにかく食って掛かって下さい。そうすれば、官民間問わずどんな進路を選ばれても、活躍できる素地の形成はできているはずですよ。

佐藤 学

宮城県出身、東京理科大学基礎工学部卒。現在、日興コーディアル証券公開業務部勤務。

## Message



### 公共性について考える

東北大学大学院公共政策大学院長・教授（租税法）  
澁谷 雅弘  
1966年4月4日、北海道滝川市生。1989年3月、東京大学法学部卒業。東京大学助手、講師を経て、1995年2月より東北大学助教授、2005年4月より東北大学教授、2006年4月より公共政策大学院長

東北大学公共政策大学院は、本年度で3年目を迎えております。今年3月には、第1期生が2年の課程を経て修了しました。その中で、私も、政策プロフェッショナル養成のあり方について多くのことを考えさせられております。

政策プロフェッショナルにとって必要な資質には、多くの事柄が含まれますが、その一つとして、今回は「公共性」について深く考える力というものを見てみます。

人は、日常的な業務の中に埋もれて自分の仕事の意義を見失ったり、自分のしていることが有益であると安易に思いこむことが少なくありません。とりわけ、組織の中で行動していると、その特定の組織にとっての利益と、全体の利益とを混同しがちです。しかし、そのような姿は、政策プロフェッショナルとはほど遠いものです。政策プロフェッショナルは、自分の仕事が、公共性とどのように結びついているかを常に考えていなければなりません。



### 自ら学ぶことの大切さ

東北大学大学院公共政策大学院 前院長・教授（都市法）  
生田 長人  
京都大学法学部、建設省入省、京都府企画調整局長、鹿児島県警察本部長、環境庁官房総務課長、内閣府神奈川復興本部次長、国土庁土地局長、防災局長、2000年退官後、同年10月東北大学大学院法学研究科教授、2005年4月～2006年3月まで公共政策大学院長

私たちの公共政策大学院では、今日の時代における「公益」とは何かを、学生諸君に正面から考えてもらうことが最も大切なことだと考えています。

今年度からスタートした「地域社会と公共政策」講義では、地域社会が直面している深刻な課題を取り上げ、立場の異なる複数の外部講師により、異なる視座から、同じ問題を議論してもらい、公共政策が実現しようとしている「公共性」に様々な側面があること、様々な「目線」の高さをもつ必要があることを認識してもらうための授業を行っています。今期の課題は「地域社会

と公共事業」ですが、公共事業が地域社会に果たすべき役割とそのあり方を巡って熱い質疑が交わされています。また、当大学院設立以来、着実に成果を挙げてきた公共政策ワークショップでも、学生諸君は、与えられた政策課題の解決に向けて、初めて経験する政策立案過程の作業の中から、多くのことを学び取りつつあるようです。

私たちの公共政策大学院では、教えてもらうことより、「自ら学ぶ」ことに、より重点を置いた授業が展開されています。